

# 浪江山火事デマ拡散

## 福島のリテラシー

### (3) 帰還困難区域「十万山」火災報道から考える

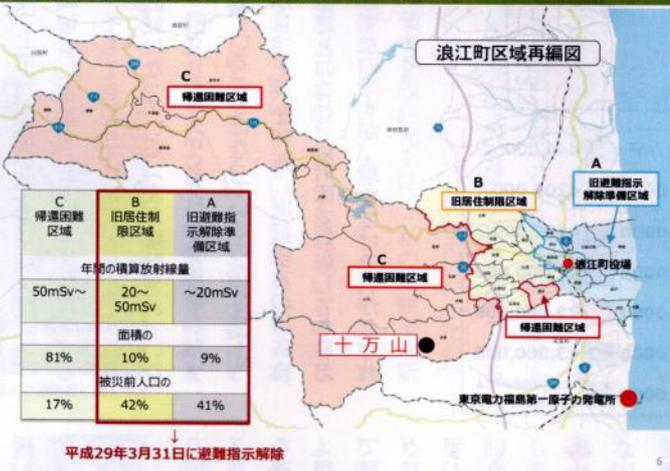
coba 2011

#### デマ扱い報道の勇み足と危うさ

福島第一原発から北西に約10km、浪江町の帰還困難区域にある十万山（標高448.4m）で4月29日に起きた山林火災。居住制限区域と避難指示解除準備区域が解除（資料1）されてわずか1か月、火災の規模も大きく、林床に沈着した放射性物質が火災により再浮遊、拡散する可能性や、健康への影響を懸念する投稿がインターネットのツイッター（短文投稿サイト）などに流れた。

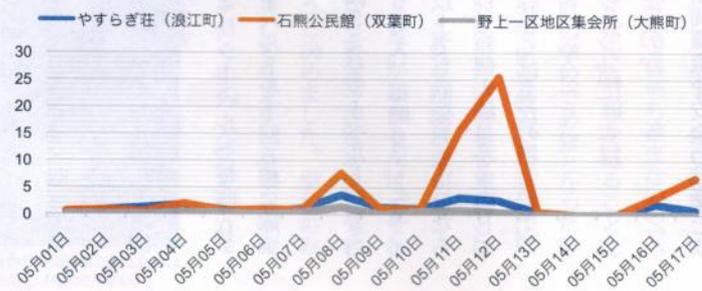
「帰還困難区域／浪江山火事デマ拡散」。福島民友（以下「民友」）5月3日付け社会面トップ記事の大見出し（縦5段）である。続けて「ツイッターに『関東に放射性物質』」「専門家ら『まどわされないで』訴え」「放射線量目立った変動なし」の見出しを立て、

放射線量による区域指定（平成29年3月31日～）



資料1 浪江町の解除区域と帰還困難区域の概略（「なみえ復興レポート」平成29年5月より）

大気浮遊塵のセシウム137濃度 (mBq/m³)



出典：福島県大気浮遊じん（ダスト）の測定結果より

資料2 大気浮遊じん濃度の推移

「客観的な事実としてモニタリングポストの値に変化がないことを発表していた。一部の方々にとって、不愉快な内容だと思っただけ、知事の御感想と、（紀伊民報が）新聞協会に加盟しているれっきとした報道機関なので何か対応される考えはあるのか、その2点について伺いたい」（傍点筆者）と抗議や謝罪の用意はないかと迫った。

問題にされたコラムとはどのような内容だったか。

5月2日付け「山火事と放射線」は、東電元社員の情報として「汚染の激しい地域のため除染ができていない。火災が起きれば花粉が

「火災に伴う放射線量の上昇による健康への影響はない」と断じた。

だが、チェルノブイリ事故後の大規模森林火災の際に放射性物質の再浮遊拡散が起きた事実は広く知られており、また福島第一原発事故後においても、風や雨による放射性物質の再浮遊と二次汚染の可能性を示唆し、今回のような山林火災を想定した事前対応の必要性に言及した研究報告が2014年当時出されている。

関東地方まで放射性物質が飛んだというのは極端としても、測定の態勢も十分でない初期の段階で、民友のデマ扱い報道は世論誘導につながる危うさがあった。

#### ミリベクレル表示をベクレルに：単位を操作し矮小化

案の定、8日の測定で現場周辺の大気浮遊じん（セシウム137）の濃度上昇（前日比3〜9倍）が確認され、11、12日にはさらに高い濃度を示した（資料2）。

県の測定結果は1日遅れで公表される。したがって8日の結果を10日の紙面で続報として扱うことができた。しかし、新聞各紙で報じたのは毎日新聞（資料3）だけだった。

民友は13日の社会面（資料4）で「大気中から0.015ベクレル検出／県「健康に問題ない」と伝えた。

見出しに取られたのは双葉町石熊公民館

#### 紀伊民報コラムはデマを書いたか

5月8日の福島県知事定例会見。前述のようにこの日複数の地点で大気浮遊じんの濃度が上がっているが、会見時刻（午前10時から20分）にはこの測定結果はまだわかっていない。

会見では、「山火事による放射性物質拡散の可能性」（5月2日付け）と書いた和歌山県田辺市の夕刊紙「紀伊民報」に対し、読売新聞記者が「客観的な事実としてモニタリングポストの値に変化がないことを発表していた。一部の方々にとって、不愉快な内容だと思っただけ、知事の御感想と、（紀伊民報が）新聞協会に加盟しているれっきとした報道機関なので何か対応される考えはあるのか、その2点について伺いたい」（傍点筆者）と抗議や謝罪の用意はないかと迫った。

飛ぶように放射性物質が飛散する」を取り上げ、「6年が過ぎても、収束がままならぬ事故のこれが現実。政府も全国紙も、この現実にあまり鈍感すぎるのではないか」と対岸の火事扱いに疑問を呈した。

続く9日付けコラム「福島の火事」は、福島県内の農業者から「自宅の測定値には変動がない。記事で風評被害が助長される」という批判が寄せられたことを紹介し、「新たな拡散は心配するほどではなかったという。不安は杞憂ではなかったといえる。心配をかけ、迷惑を与えたことになる。申し訳ない陳謝する」と書いた。

測定値のその後の推移を考え合わせればコラムは必ずしも杞憂ではなかった。

このコラムの本質は「原発事故で汚染され、放置された地域での山林火災への対応、常に放射性物質の飛散量に気を配って生活している人たちのこと、内部被曝のリスクを考えると、今も心配でならない。そうしたことについて政府の関心が低いように見えることにも変わりがない」にある。これのどこが「不愉快な内容」なのだろうか。

国、政府の福島への扱いに現地で接していると、「政府の関心が低い」という表現さえも生ぬるいと感じるものの、コラムの指摘は大筋で間違っていない。

**指摘されていた放射性物質の再浮遊と2次汚染**

十萬山火災の報を聞いた時、SPEEDI（放射能拡散予測システム）を使えばいいのに、と思った。放出源情報や、風向風速などの気

象条件、地形データをもとに放射性物質の移流拡散ルート、浮遊じん濃度、被ばく線量などを予測し避難支援や放射線防護に資するシステム。

SPEEDIは主に1次拡散に投入されるツールだが、飽本裕氏（帝京大学教授）による「粒子状放射性物質の再浮遊と移流による2次汚染」（日本保健物理学会学会誌「保健物理」2014年、Vol.49所収）は、地面に落ちた放射性物質が雨や風によって移流、拡散していくメカニズムについて解説している。緒論と結論部から抜粋引用する。

**I 緒論**

▽東京電力福島第一原子力発電所事故により、大量の放射性物質（核種）が東日本各地に飛散、沈着したが、様々な原因により、放射性物質が再浮遊、拡散することが認識されている。

▽放射性微粒子の再浮遊（飛散）機構には、建設工事、除染、火事、降水、農作業、自動車交通等があるが、最も支配的なのは風由来で、そのため関連論文が比較的多い。（傍点、筆者）

**V 結論**

▽現実的な懸念事項として、浪江町赤宇木等の高汚染山地及び双葉・大熊町等の高汚染街区の火災がある。風向次第で、火災由来の再浮遊と移流により汚染区域が拡大する可能性がある。

▽このような事態をできるだけ抑制するため、火災による2次汚染の実験やシミュレーション研究など周到な事前準備が求

められる。

▽風じんの影響が最大と見なされる地点は南相馬市と浪江町の阿武隈山麓一帯で、風上には浪江町赤宇木等の高汚染地帯が位置するため、強烈な山越え気流「阿武隈おろし」に駆動された風じん等による2次汚染が発生しやすい。

2014年の時点で、今日この事態を予測したかのような論考がすでに公表されていたのである。

なお、飽本氏は都市部の幹線道路や駐車場における車による放射性物質の再浮遊、2次汚染の可能性と把握のための市街区域での調査なども提唱している。この論考はオープンになっているので、関心のある方はご一読されたい。

**放射性セシウム 3〜9倍に上昇**

浪江・山林火災

東京電力福島第一原子力発電所事故による放射性物質の再浮遊と移流による汚染が懸念されている。浪江町赤宇木等の高汚染山地及び双葉・大熊町等の高汚染街区の火災がある。風向次第で、火災由来の再浮遊と移流により汚染区域が拡大する可能性がある。

測定地点	測定値 (Bq/m <sup>3</sup> )	基準値 (Bq/m <sup>3</sup> )
浪江町赤宇木	0.17	0.017
浪江町赤宇木北西	0.10	0.010
浪江町赤宇木南西	0.07	0.007
浪江町赤宇木西	0.05	0.005
浪江町赤宇木南	0.04	0.004
浪江町赤宇木北	0.08	0.008
浪江町赤宇木南西	0.06	0.006

※測定は5月10日午後1時～2時、浪江町赤宇木にて実施された。

資料3 5月10日付け毎日新聞福島版

**市民団体の独自調査を伝えた「民の声新聞」報道**

国、県や報道がやらないのであれば、自分たちの手で、トリネン吸着法という手法で周辺モニタリング調査に取り組んだ、福島老朽原発を考える会（フクロウの会）「浪江町山林火災のリネン吸着法による調査」の結果が明らかになった。

草の根の市民科学者ともいべき人たちの調査活動と浮き彫りにされた事実をフリージャーナリスト鈴木博喜さんの「民の声新聞」6月5日号は、「山林火災と放射性物質」やはり2次汚染はあった。ちくりん舎のリネン分析。大熊町で124ミリのベクレル/m<sup>3</sup>、南相馬市では3倍に上昇。「空間線量一辺倒やめよ」と伝えている。

多数を擁する地元の新聞テレビは取材アンテナが低いのか、好奇心が乏しいのか、県庁提供の情報に寄りかかり、市民の側から出てくる情報には食指が動かないようである。

**大気中から0.05倍検出**

浪江町の山林火災による放射性物質の再浮遊と移流による汚染が懸念されている。浪江町赤宇木等の高汚染山地及び双葉・大熊町等の高汚染街区の火災がある。風向次第で、火災由来の再浮遊と移流により汚染区域が拡大する可能性がある。

測定地点	測定値 (Bq/m <sup>3</sup> )	基準値 (Bq/m <sup>3</sup> )
浪江町赤宇木	0.17	0.017
浪江町赤宇木北西	0.10	0.010
浪江町赤宇木南西	0.07	0.007
浪江町赤宇木西	0.05	0.005
浪江町赤宇木南	0.04	0.004
浪江町赤宇木北	0.08	0.008
浪江町赤宇木南西	0.06	0.006

※測定は5月10日午後1時～2時、浪江町赤宇木にて実施された。

資料4 5月13日付け福島民友社会面

1 飽本一裕氏（帝京大学大学院理工学研究科）「粒子状放射性物質の再浮遊と移流による2次汚染」  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jhps/49/1/49\\_17/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jhps/49/1/49_17/_article/-char/ja/)

2 福島老朽原発を考える会（フクロウの会）「浪江町山林火災のリネン吸着法による調査」  
<http://fukurou.txt-nifty.com/fukurou/2017/06/post-9dc3.html>